



教員が研究の楽しさを語る

第228回(7/9)増島 麻里子先生推薦

ブックガイド



※掲載されている本はL棟2階 あかりんアワーのコーナーに配架されます。

Book1

コウモリであるとはどのようなことか

著者：トマス・ネーゲル著；永井均訳

出版：勁草書房, 1989.6

コメント：死について考えるということは、いかに生きるかを考えることです。事故や病気による死が話題になると、当事者やその家族、医療者のみならず、第三者としても、死や生について考える機会を得ます。本書籍は、社会科学研究院の教員と終末期医療に関する共同研究において紹介いただいた本であり、大学院の授業でも使いました。良い死、悪い死とは何か、根本的な問いを考えさせられる哲学書なので、医療系以外の学生にとっても深い学びが得られる書籍です。



死、性、戦争、意識etc. — 明晰な表現と誠実な議論によって「信」と「客観」との関係を探る。現代哲学のホープ登場。
—— 勁草書房 ——

Book2

エンディングノート：Ending note (DVD)

著者：砂田麻美監督

出版：バンダイビジュアル, [2012.5], c2011

コメント：主人公の娘である監督が、進行胃がんを患った父が生きる最期の日々までを撮り続けた実録です。キャッチフレーズ「高度経済成長期に熱血営業マンとして駆け抜けた“段取り命！”のサラリーマン。ガンという、ふいに訪れた人生の誤算。どうする？」と、深刻な状況の中にも、時にユーモアを交えながら、一人の男性の生き様が描かれます。以前の普遍教育科目「病とともに生きる」や看護学部の講義で用いた際は、学生から大きな反響がありました。貴重な示唆を得ることができる映像です。





Book3

看護実践にいかすエンド・オブ・ライフケア 第2版

著者：長江弘子編集

出版：日本看護協会出版会，2018.6

コメント：看護学、医学、社会学の著者らが、日本におけるエンド・オブ・ライフケアの特徴や社会的背景、終末期医療や研究の最新の動向等を著述した書籍です。健康なうちから、終末期において受けたい医療や自分らしい生き方とは何かをあらかじめ話し合う概念をアドバンスケアプランニングといい、重要性が改めて認識されてきています。意思決定に関わる具体的な事例が多く掲載されているので、看護職者だけではなく他医療者にも参考になると思います。本書では、「日本および世界におけるエンド・オブ・ライフケア研究の動向」の執筆を担当しました。

